

る。しかるに浦の城代三浦兵庫守、世になき九郎に組したるこそ愚かなり、主典罷り向かつて追放仕るべし、と仰せ出されける。主典畏みて御前を罷り立ち、その用意をぞしたりける。主典つくづく思うよう、盛長は甲府、武田の武士なれば容易は討たれ候まじ、今宵夜討ちにすべしとて、その勢大軍にて浦をさして急ぎける。かくてその夜、西風激しく吹きければ、蝦夷が湊に陣を取り、夜の明け行くを待ち居たり。

これはさておき、兵庫守は檜山の城を責め落とし、一兩日人馬の足を休め、九郎殿へ参らんと用意する所に、蝦夷の湊の何某、浦の城へ参り愛季公より討手として大勢にて今宵、蝦夷が湊に陣を取り御油断なされ候な、と大息ついて申しける。兵庫守、家の郎等、小和田甲斐守・中臣左衛門尉・大内越前守・長谷部隼人に仰せ付けられ一、二の門を指し堅め、甲斐守、足軽どもに弓・鎧・鉄砲を持たせ待ちかけたり。

間もなくその夜の朝方に討手の大将石岡主典、追手の木戸口へ駒を乗り寄せ、大音上げていうようは、いかに兵庫守、聞き給え、この度愛吉殿に組したる者ども追罰仕るべき旨、愛季公より仰せを蒙り、石岡主典罷り向かつて候なり、九郎殿は先日討死し給うぞ、疾々切腹いたされよ、と高らかに呼ばわりける。盛長聞いて、南無三宝討たれさせ給うかや、この上は是非もなし、かねてこしたる事なれば、やがて矢倉に掛け上がり見たまえば、浅黄の旗に木瓜付けたる印なり、扱は主典罷

り向かつて候なり、とても死する命なり、隼人、越前、あれ押し払え、畏つて候、と門外に掛け出、今日を限りと戦いける。城の勢、残り少なに打ちなされ、あるいは自害、あるいは、落ち行く者もあり。今はようよう一族二百ばかりになりける。小和田これを見て齒がみをなし、かかれやかかれや者どもと、命を捨て切り廻る。向かう者幸いに真甲小額、左右の小手はらりはらりと切り倒し、残る勢をむらむらはつと追い散らし、小高き所にかけて上がり、大息ついて控えたり。

これはさておき愛季公、何とか思し召されけん、松田・小野寺兩人に五百余人下され、浦へ罷り向かつて主典に加勢仕れ、と仰せ付けられたり、兩人御前を罷り立ち大軍引き具して、浦の城へ押し寄する。主典が軍兵、いよいよ力を得、無二無三に責め入り切り伏せ、二の門まで責め入りける。城の兵、甲斐・隼人、かれこれ一、二十騎になりけり。兵庫守、矢倉に掛け揚がり見給えば、味方ごとくとく討死す。今はこれまでなり、と御身内に三浦左衛門尉を召され、我この度の軍は勝つべき軍にあらじ、我速やかに腹切るなり、汝は千代若を伴い、檜山沢の寺へ落ち行き、何とぞもり立て、成人しなば出家になして、我らが後を問うべきなり、万事頼む、と仰せける。

左衛門畏みて、この度御最期の御供と存じしかども、古より死は安く生は難し、と申せば、ながらえての御奉公かたかるべし、何れも同じ御主なり、片時も早く急がん、と泣く泣く城を忍び出、沢の寺へと急ぎける。武士の習と申せども離れ難きは恩愛なり。兵庫守が心の内、推し量られて